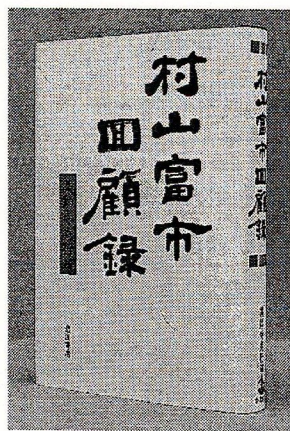


村山富市回顧録

村山富市・述 薬師寺克行編

(岩波書店・2003年5月)



やくしじ・かつゆき 1955
年生まれ。新聞記者などを
経て、東洋大社会学部教授。

政治に生きた現実感覚

本書は東洋大学・薬師寺克行教授による村山富市元首相へのオーラル・ヒストリーである。青年期の逸話、国会議員への道のり、社会党幹部時代の消費税国会や自衛隊派遣問題、非自民連立政権から自社さ連立政権での総理就任、歴史的な「村山談話」へと幅広い時間軸で、生きた証言が展開されている。

「村山富市」という固有名詞から何を想起するだろうか。保革対立の戦後政治を象徴する存在、あるいはその崩壊を決定つけた社会党最後の政治家というのが一般的なイメージかもしれない。しかし、そうした印象論を吹き飛ばすような現実感覚が本書からはうかがえる。

日米安保の功罪と真剣に向き合い、「イデオロギー

の時代」としてではなく、「現実主義の時代」として世界を捉えるリアリズムの平衡感覚がその言葉にはあふれている。無論、社会党が教条主義的なイデオロギーを掲げていた時代にあつて、村山氏のリアリズムは十分に発揮されなかつたであろう。その苛立ちが行間に現れている。実際、村山氏の主張にはイデオロギー的なものがほとんどない。その理想とする社会民主主義「すなわち「民主リベラル」ではなく「社民リベラル」であること」の主旨は、暴力や大衆行動ではなく議会を通じた社会改革を追求し、階級政党ではなく大衆政党として、保守政党とは異なつた理念の私たちを提示することにあるという。そこで強調されていることは、イデオロギーではなく、むしろ現場の人間の現実感覚である。その意味で村山氏の目指していたリアリズムとは「普通の人の」政治に他ならない。

このリアリズムあればこそ、独善的なナシヨナリズムを排し、過去の戦争と真摯に向き合う「村山談話」が可能だったのでないだろうか。確かに村山氏は社会党が低落し、まさに解体されていく時代の党首であつた。肯定的な評価を下す人は多くはないであらう。しかし、私たちは村山氏のリアリズムから、戦後という「イデオロギーの時代」のもうひとつの側面を垣間見ることができるともかもしれない。

(九州大准教授・政治学 大賀哲)